皆様には健やかに穏やかに、新たな年を迎えられたこととお慶び申し上げます。

元旦の「旦」は「夜明け」のことです。この日が特別なのは「日・月・年」の三つの新たな始まりの朝だからです。大晦日と元旦、一瞬の違いなのに空気も改まり、まるで別の自分になったような清々しさと共に「よしやるぞ！」といった気になるから不思議です。

しかし世情は、拡大し続けるコロナウィルスに懼くする毎日です。又地球温暖化の影響は、世界各地で異常気象による災害を惹き起こしています。世界中で山林火災や豪雨災害などが頻発し多くの人々がその被害にあい、困窮した生活を、今なお送っています。北極や南極の氷河も融解し、シベリアの永久凍土も溶け出して、閉じ込められていた温室効果ガスや様々な細菌なども、地上に出てきているそうで、今後、どのような変事が起きてもおかしくないとの論説を読んで、大変な時代に生きていることを実感しました。

私達人間は、天地自然の恵みに生かされていることに感謝しながら生きていかなくてはなりません。人間も地球上に暮らす生き物の仲間だからです。

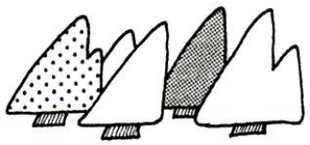
しかしながら、人間が欲望を満足させる為に、環境破壊を続けてよいわけはありません。共生の心を大切に、環境にも自身にも、やさしく生きていきたいものです。

すがすがしい心

亡き人の法事を営んだり、又お墓参りをすると、私達は何となく晴れ晴れしいというか、すがすがしい気持ちになれます。

私達の日常は、社会の中で多くの広範囲に亘る決めごとを守るために、意識するしないにかかわらず、常に張りつめているものであり、或いは「私が」「私が」という我執の心が支配して、なかなか安らかな心になることができません。

供養をしたり、墓前にお水やお花、香を手向け、手を合わせる時、何事もすべて許してくれ、見守ってくれるであろう父母の霊や先祖の霊を身近に感じ、心のわだかまりや、頑張って生きていることへのいたわりや励ましの声を聞くことができ勇気や活力がわいてくるように感じられます。



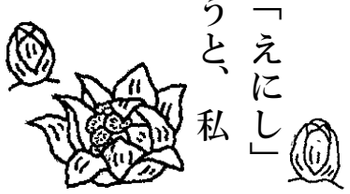
もっと言うなら、それらの時間は、心が解き放たれ、自分の息が自然とできる安らかな時間でもあります。

先般あるお宅で、亡き父母の御法事を営まれたのですが、もう六十才を過ぎた施主の方が

「方丈さんよぉー、今日は法事をやってもらって、本当によかったですよぉー。俺の頭をオヤジとオフクロがなでてくれるような感じが、お経の間、ずーっとしていましてネ。すっごく嬉しかったですよぉー」

と帰り際にお礼を言われ、深々とお辞儀をされました。

この感じが、供養の功徳であり、「えにし」という目にみえないつながりだろうと、私も幸せな思いがしたことでした。



○父の五十回忌法要に思う

父である眼蔵寺・玉宝寺廿八世寿天博康大和尚が亡くなって、五十年の節目を、この三月に迎えます。父は寺の住職の他に中学校の教員もしていました。父の教え子達は「こわい先生だったヨ」とか「目がギョロリとしていて、ダルマというあだ名でさ、今思い出してもふるえるヨ」などと、口を揃えて言います。

その頃、どこをみても皆が、貧しい生活をしていました。私の家も例外でなく、秋になると台所の隙間から木の葉が入ってくるような庫裡に住み、鶏を飼い、わずかな土地を耕して、父は勤めに行く前に、クワをふるっていました。姉などは、台風が来る前は、狩野川の水があふれて床下まで流れ込んだ時の用心に、糞尿を、母とこやし桶に入れて近くの竹藪に捨てに行った経験もあるそうで生活に窮々とした毎日でした。それでも教え子の中に複雑な家庭の子などがいると、預って泊まらせたり、食事の席に見知らぬ子がいたりした経験も一度や二度ではありませんでした。

そんな側面をもつ父は、私を「弟子として育てても、息子を育てた覚えはない」と常日頃言っていました。試験前であろうと、勉強机に向かっていると、「何をしているんだ。草むしりをしろ。身体を動かさない奴は、ろくな者にならない」と叱りました。「学校の先生の言うことか！」と反発しながらも、父の鉄拳がこわくて、教科書やノートを片手にテスト勉強をしながら帰る友達を、うらやましくみたものでした。外を掃くホーキの目、床をふく雑巾の跡、父は一ツ一ツ目を皿のようにして駄目出しをします。食事の作法をはじめ、一挙手一投足に至るまで理屈や道理で説明をしてもらえるわけもなく、唯、叱られる毎日でした。

しかし永平寺に上山した時、「あゝ、師匠（父）の言っていたことは、これだったんだ」と何度、得心したことでしょう。同安居（同じ修行仲間）の者達が、慣れぬ生活にあたふたする中、私は臆することなく食事、作務（与えられた仕事）読経と、修行生活をすることができました。

生きている時には、いろいろな煩雑さから、いつもいつも心が寄り添ったわけではなく、時には感情のすれ違いやぶつかりあいもあったものの、そんなこと全てが、お互いさまの人生の歩みであったと今ではとらえられています。

浜までは　海女も
　蓑着る　時雨（しぐれ）かな

晩年の師匠が、よくこの川柳を引用して説教をしていました。

海に入る海女が、いづれ濡れる身体を、いとおしみ、最後まで濡れまいと努力する姿を、周りの者が「どうせ、濡れるのに！」と笑ったのでしょうが、ひとときひとときを無駄にすることなく、最善を尽くした父の好んだ父らしい一句だナァと私は思っています。

そんな父の五十回忌の法要を、心をこめて営ませていただこうと思っています。

一口伝導板

○寒い日があるから
　暖かい日がありがたい

○正しい願いは　必ず叶う
　祈る心が　運を呼ぶ

○愛別離苦
　別れと出会いは裏表
　終わりは次への　スタートライン

とわのいのち

―報恩回向―

令和五年 年回表

一周忌	令和四年
三回忌	令和三年
七回忌	平成二十九年
十三回忌	平成二十三年
十七回忌	平成十九年
二十三回忌	平成十三年
二十七回忌	平成九年
三十三回忌	平成三年
三十七回忌	昭和六十二年
四十三回忌	昭和五十六年
四十七回忌	昭和五十二年
五十回忌	昭和四十九年
百回忌	大正十三年

毎年、年末になると、皆さんが目を留めやすい廊下に、翌年の年回行事にあたる方々の御戒名と施主名を書いたものを貼り出します。そして年が改まると、お施主さんのお宅に、年回にあたっていることをお知らせする葉書を出すようにしています。

すでに昨年末、年回法要がお済みの方、又御法事の申し込みをなさっている方にも、その葉書がいくこともあるかとは存じますが、通信事務は機械的に行っておりますので、ご了解の上、ご容赦下さい。

私

三つの「私」があるという

自分が知っている「私」
他人が知っている「私」
本当の「私」

本当の「私」を
味わえる一年でありたい